

### 医療面接実習スタート

医学教育センター長 今井裕一

来年3月に行われる共用試験 OSCE のための医療面接実習が、4学年次を対象として9月7日から16日まで行われました。7日と14日の午前中に、基本的な講義をした後に、午後からは実際に模擬患者さんの面接を行いました。1) ドアまで行って、呼び入れる。2) 名前の確認と自己紹介。3) 今日は、どうなさいましたか？(主訴)。4) 症状の内容、程度から病気を推論しながら面談。5) 既往歴、家族歴。6) 生活環境、生活習慣(飲酒、喫煙、排尿、排便、月経)。7) 患者の心配、不安、希望を聴取する。8) ところどころでまとめを行い患者と確認する。9) 患者に追加することはないか確認する。10) お礼を言って面接を終了する。という手順を一生懸命覚えていました。終了した時点で模擬患者さんの感想を聞いてみましたが、大変よく聞いていただいたという意見が多かったです。4学年次には、OSCE本番前に再度、医療面接の時間を調整しますが、友人同士で、時々練習してください。

また、3学年次でも医療面接の時間を、9月8日(木曜日)から11月上旬まで、プレOSCEという名前で開始しています。面接の基本を講義した後、ロールプレイを行い、9月29日から模擬患者さんと面接を行います。コミュニケーションが医療の基本ですので日常生活でも気をつけて会話を楽しんでください。

## 学生さんの感想

「今日はどうされましたか？」

医学部4学年次 大石秀和

初めて模擬患者さんと向かい合ったとき、最初の「今日はどうされましたか？」の一言さえ緊張でままなりません。自分を含めて大半の学生が緊張のあまり何を尋ねればよいのか分からなくなり、頭の中が真っ白になって面接の途中で止まってしまい、与えられた6分間の持ち時間を満たさずに面接を早々に終了させるケースがほとんどでした。

この医療面接とは、単に治療の前段階として患者さんの病状を聴取し、症状の原因と考えられる疾患に目星を付けるためだけのものではなく、患者さんと医師がこれから治療を行っていく上で、いかに患者さんが持って来られた不安を汲み取り、どれだけ医師を信頼してもらい治療に対して前向きになってもらえるかを左右する大切なステップです。

今回3日間で数多くの模擬患者さんと様々なシナリオで実習させていただいて、患者さんの訴えをより適切に引き出すためには同じ質問内容でもどういった聴き方をすればいいのか、自分が今まで学んできた疾患に結び付けるためには何を詳しく聴けばいいのか、どのような声掛けによって患者さんが安心感を得られるのか、色々な事を学ぶことができました。

私たちのつたない問い掛け1つ1つに嫌な顔ひとつせず臨機応変に対応してくださった模擬患者の皆様のご協力に感謝し、3月に行われる共用試験 OSCE に向けて頑張っていきたいと思うと同時に、この実習で得た経験を臨床への第一歩として役立てていきたいと思っております。



医療面接実習中の大石君及び模擬患者さんの様子

# 今、教育の様々な場面で「模擬患者さん」が必要とされています



模擬患者さん代表の桑谷さんによる講演の様子

## 《医学部；「プレOSCE」》

医学部3学年次において9月8日（木）から「プレOSCE」が実施されています。この授業では、学生さんは医療コミュニケーションの重要性及び手順を学びます。授業では模擬患者さんの代表者から実習に向けての心構え等についてご講演いただいたうえで、他の模擬患者さん方にもご協力いただき実際に「医療面接実習」を行っています。実習の数をこなしていくことにより、学生さんたちは3学年次という早い段階で自らの「課題」を見つけることができます。

## 《看護学部；「看護学生のための医療面接」》

看護専門科学系 教授 土井まつ子

看護学部では、8月20日（土）に『看護学生のための医療面接』を、はじめて試行させていただきました。13名の模擬患者の皆様、今井医学教育センター長および事務局の方々のご協力に感謝申し上げます。

看護学部の学生は、4年間の教育の後に多くは看護師や保健師として就職します。初めて患者さんに出会う看護実習の時、あるいは就職した最初の頃に最も困難に感じることのひとつが、患者さんやご家族とのコミュニケーションです。この課題を克服するためにも、『模擬患者さんとの医療面接』は看護学生にとって有効な教育となる事が実感されました。

実施後のアンケートでは、ほとんどの学生が医療面接や反省会が有用であると回答しておりました。たくさんのお返事がありましたが、その中から学生の感想や学びの一部をご紹介します。



オリエンテーション風景

- ・自分に自信がないと声の大きさが小さくなるので注意する必要がある。
- ・個性や相手の状況をよく見極めて話をしないといけないことに気づいた。
- ・事務的になってはいけないことがわかった。問診表の項目を聞くことに必死になって、患者さんをしっかり見るができなかった。
- ・自分の緊張が患者さんに伝わったと思った。面接時に患者さんに不安を与えないようにすることが大切ということがよくわかった。
- ・声のトーンやスピードが早すぎて、患者さんに何度も尋ねられたので、わかりやすい言葉で話すべきと思った。
- ・ただこなしているだけというのはよくないので、気をつけないといけない。受容の姿勢が大切とわかった。
- ・面接をやってみると、いろいろと気づきがあって、今後に活かせると思った。学生同士とは雰囲気が違い、よい経験になった。
- ・家族構成を聞いたが、ただ聞くというのではなく、その人に聞く意味を考えなければならぬと感じた。



面接をする看護学生さんと模擬患者さん



相手の顔を見て話す看護学生さん